

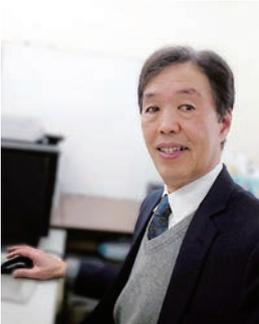
座右の銘



Seeing is believing. 百聞は一見にしかず

酒井 規雄 大学院医系科学研究科 医学分野 神経薬理学 教授

私は研究手法にイメージングを用いています。今では当たり前の技術となっている緑色蛍光タンパク質（GFP）が世に紹介された頃、タンパク質リ酸化酵素C（PKC）とGFPの融合蛋白質（PKC-GFP）を細胞に発現させて、様々な刺激によるPKC-GFPの動態観察に着手しました。この研究で運命的な出会いがありました。細胞内のカルシウムを上昇させる処置を施すと、PKC-GFPが何度も何度も細胞質と細胞膜の間を素早く行ったり来たりするのです。自動操作が出来ない古いタイプの共焦点顕微鏡で、ピントを外さないように夢中でこの現象を記録したことを今でも覚えています。その日は、繰り返し、繰り返しその実験を徹夜で行いました。今考えると、細胞内のカルシウムオシレーションに同期してPKC-GFPが動くという、至極、理にかなった現象であったのですが、おそらく、それを世界で初めて見たであろう私は大変興奮しました。イメージングによって映し出された画像は、理屈はともかく事実そのものであり、まさに「Seeing is believing.」だと確信しました。この「Seeing is believing.」をもう一度見たいと思って、以降、イメージングを使った研究を今も続けています。その後、運命的に出会ったこの画像は、雑誌の表紙を飾ることとなり、私の研究の“数少ない”良き思い出になっています。



何が嬉しいのですか？

村山 長 大学院医系科学研究科 歯学分野 医療システム工学 教授

座右の銘を書くことになり、はて？と困惑してしまいました。そのような特別な言葉を私は持ち合わせていないのです。そこで、これまでの私の人生に影響を及ぼした言葉で、ありきたりでないものが何かないと遡及思索してみても、思い当たったのがこの言葉です。これは私の大学院生時代に助手だった先生が時折口にされた一言です。学生の研究報告の際は、先生から「何が嬉しいのか？」と言われはしないかとみんな怯えていました。「研究では、こんな結果が出たので嬉しい、新しい方法を思い付いて嬉しい、といった自分で嬉しいと思える部分がないといけない。あなたの研究にはそういう嬉しい部分がないのではないか？」という意味の厳しい質問でした。研究に従事し始めた頃は、自分の行っている研究に対していつも「どこが嬉しいのか」と自問していましたが、この10年は自問する余裕がなくなっていた気がします。

私が広島大学に着任した頃、研究室の教授にこの話をしたところ、「嬉しいじゃだめだよ。ワクワクするような研究をなささい。」と言われました。広島へ来て30年以上が経ちますが、残念ながら私はワクワクした経験は一度しかありません。その時は国内外で高い評価をいただいたのは忘れられない記憶です。若い研究者の方々には、論文を執筆するための研究だけでなく、ぜひワクワクするような研究をして欲しいと願っています。